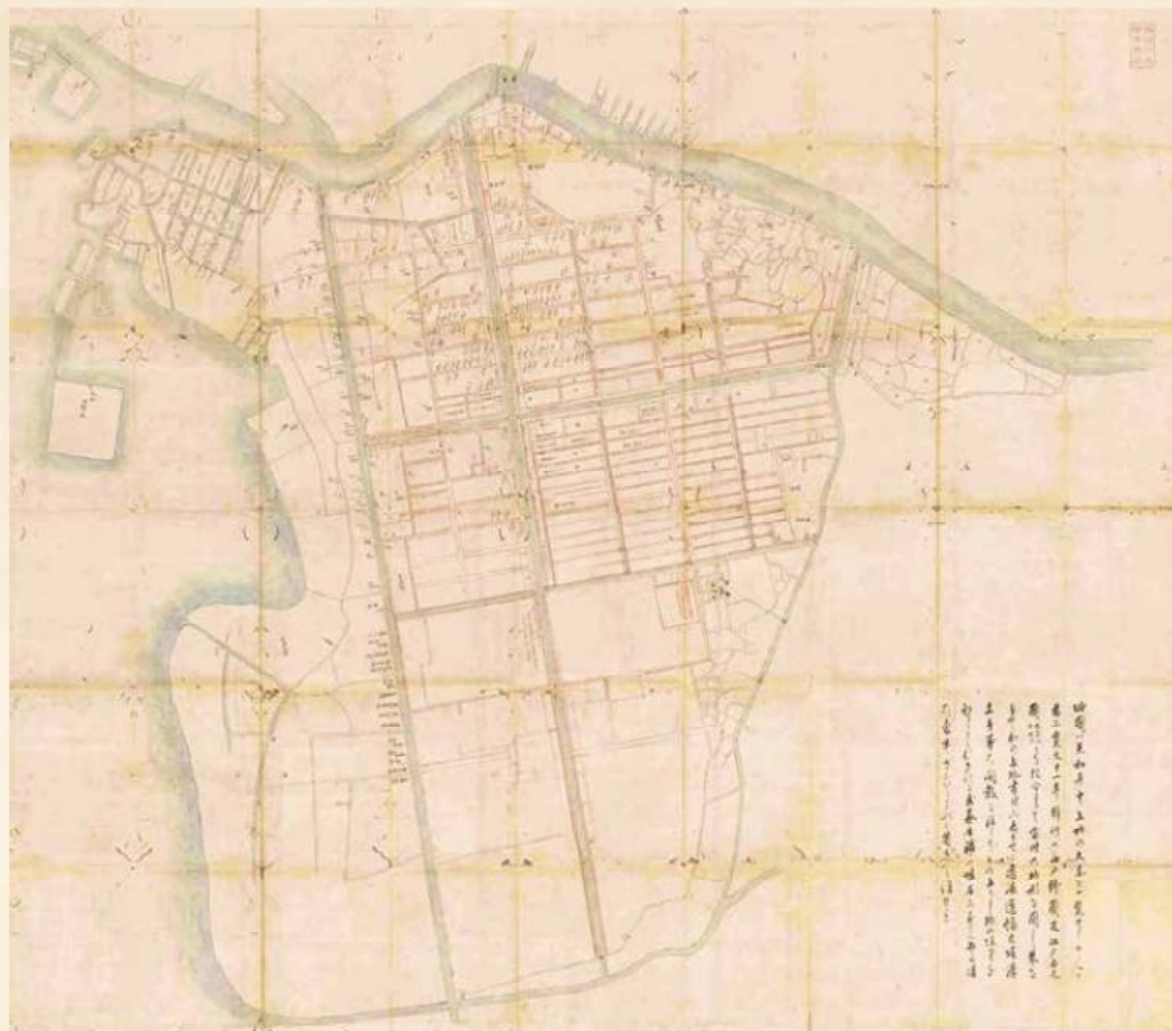




明暦3年(1657)の大火後、膨張する都市江戸の受け皿として初期城下町の周縁部で開発が進みましたが、本所の開発もその一環として本格化しました。しかし、天和2年(1682)から翌年にかけて、拝領されていた屋敷地はいったん上地され、幕府に返上されました。図の右下に記された詞書には次のように記されています。

この図は天和年中上地の大略を一覧せしめるために、寛文11年(1671)刊行の江戸絵圖と延宝8年(1680)刊行の江戸安見圖とを校合しながら当時の地形を顯示した。その上で、上地となった屋敷地を書き付けた幕府の史料をもとに、道法・道幅及び堀・溝・土手等の間敷を注して、上地となった土地の限り(範圍)がわかるようにした。しかし、武家屋敷の当主の姓名については、その後の変革が少なくないので省略して注記しなかった。

この絵圖の作成者は記載されていませんが、行政上の必要から幕府の機関において作成・利用されたものと考えられます。のちに行政上の利用価値がなくなり、歴史的絵圖として地誌調所に移管されたのでしょう。「編修地志備用典籍」の蔵書印から、そのような本國の伝来経緯を推定することができます。

ともあれ、本所開発の早い段階から、相当の武家屋敷が配置されていたようすを確認することができます。

天和年中本所 上地図

天和年間／作成者不詳